

11/9 (土) 9:00~16:00 Zoomによるオンライン開催 参加者7名

最初に、共同研究者(池田)より、大阪で行われた全国教研の報告を兼ねて基調提案を行った。奈良教育大附属小への不当な行政の介入問題は大きな衝撃であるが、これにひるむことなく、ほんとうに子どもたちの人間的な成長を支える、「ダブルスタンダード」によるしたたかな民主的教育が求められている。また、文学を教えることの重要性が、改めて参加者全体の共通認識となった。

報告されたレポートは以下の7本である。また、「教材研究のためのワークショップ」も開催した。今年参加者が少なかったが、ひさびさに、小中高大すべての校種の教員がそろふことになった。また、1日開催としたため、多彩なレポートとともに充実した討議となった。ここでは、発表順ではなく、レポートの内容をふまえた順で紹介していきたい。

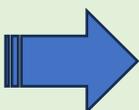
表現・作文——書き綴ることで、人は成長する

(1)言葉の獲得を通し、本来の自分を出す ～生活綴り方を根底に～ 平川美和(空知作文の会)

ことばにならない感情表現でしか自己を主張することしかできなかった、しかもひらがな程度しか身につけることのできなかつたYさんが、「あのね帳」などによる平川氏の指導を通じ、3年がかりで見事に「本物Y」に成長する姿が、その指導の過程とともに、克明に記録されている。自己を綴ることを繰り返すなかで、人としてのYさんの成長がはっきり見て取れる。そして「書く」ことから「語る」ことへ、大きな成長を卒業時にみることになる。校内放送を「ジャック」して、平川氏と支援員の先生への感謝の気持ちを連呼したというエピソードには、筆者(池田)も思わず泣けてしまった。

Yと ひらかわと

おこる
おこるです
おこる おこる
好きです。
(2021.4.14)



ぼくは きつねが すきです。
なぜかという きつねは ひよことあひるとうさぎを まもったから
つめでガリッと おおかみにやられた。
きつねとおおかみは ほえた。たたかいは はげしい。
けむりが たった。きつねは ちだらけ。そしてしんだ。
きつねは (三人だけでがんばってね。かわいかったよ。)と わらって しんだ。
(2023 「きつねのおきゃくさま」の読後感想)

小四の出会った頃のYさんは、いったい何に腹を立てているのか、伝わらないことも多くありました。『あのね...』と、日記を書く指導を始めると、書くことは、感情のコントロールに、大きく影響する様子でした。その際、どんなにつたない表現でも、読めなくても、こちらが読み取る努力で、決して書き直しなどせず綴らせました。書いてくれたことに寄り添い支持する態度で受け止め続けました。あのねを始めて、ご家庭でも「お母さん、お兄ちゃんは良い子だから叱らないであげてね。」などと心の内を話してくれることが増え、驚いたと報告を受けます。出てきた本音が、自己中心的ではなく、周りの人を想う優しい言葉が多いこともYさんの特徴です。優しい心が行動にも表れ始めます。
[レポートより]

書き綴ることが、単なる言語の習得にとどまらない、子どもの人間的成長の大きな支えとなることを、実践で見事に証明したと言えよう。参加者一同の大きな感動を呼んだ、貴重な実践記録である。

◇書くことで自分の行動が意味づけられ、自分の思いや願いを自分の中で明確に感じとれるようになり、それが自分の生き方や行動につながっていく。自分の思いを綴る作文が、子どもの成長につながるという点でも、学校教育の中で大事にされなければならないと、改めて実感した。
◇レポートの中で「Yくん」の呼称が、後半「Yさん」に変わっていった。レポーター自身も気づかずに表現していたそうだが、それは、出会った頃赤ちゃんのようだった「Yくん」が、本来の自分を表出し、成長した証なのだろう。
[参加者の意見より]

(2)「日本語表現」指導についてⅢ

東谷一彦(札幌国際大学)

昨年に引き続いて、短期大学での「日本語表現」に関わる講座の報告。今年は1年前期の「学びの技法」における表現指導が紹介されている。入学前課題や読書課題を振り返りながら、大学での「学び」の基礎をつくりあげるのが、この科目の設置の趣旨である。したがってその内容は、小中高での「国語」の内容に含まれないものもある。この入学前課題や読書課題などについてもレポートでは丁寧に述べられていたが、興味深いのは、各授業で「授業感想」を書かせ、その一部を次時に学生に提示しているこ

とである。分科会での議論も、この授業の「振り返りシート」あるいは「リアクションペーパー」についてのことが中心になった。

昨年度、総合生活キャリア学科の学生が授業評価のコメント欄に次のようなことを書いていた。
「リアクションペーパーで自分では気づけなかったことに気づけたことが多かったから、すごくよかったです」「何事にも丁寧に対応していました。リアクションペーパーの解説を聞くのが好きでした」こういう反応があるというのは、とてもありがたい。 [レポートより]

類似の実践をされている参加者もあり、共感の声が上がった。東谷氏の丁寧な指導と、学生の声を拾い上げ次に生かすスタンスを、私たちも大切にしたいものである。

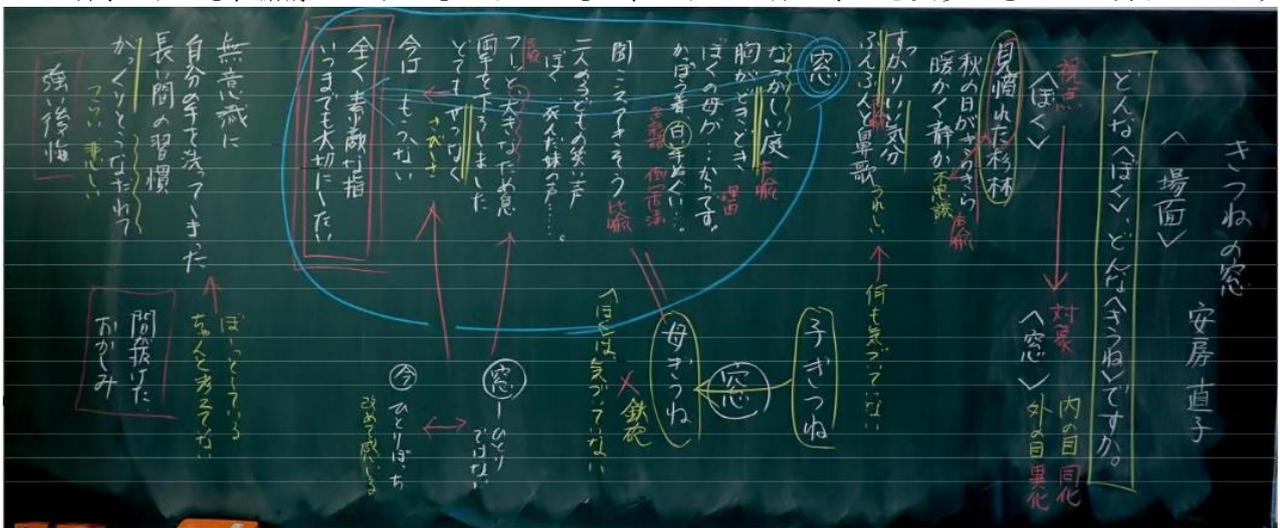
◇話し言葉、書き言葉の区別は必要だが、それを間違い、正しいとするのは危険ではないか。
◇生徒は、書いたものが何がしかの形で返ってくればうれしいものだから、また書こうという気になっていくのではないか。 [参加者の意見より]

文学教育——文学をよみ、ことばと向き合うことが、子どもたちの認識を育て、人としての成長を促す

小学校2本、高校1本。いずれも精緻な教材研究の上で、子どもたちとともにことばと徹底的に向き合う授業実践の報告であり、丁寧に作品の形象をよみこむ文学教育が、人間形成に不可欠なものであるということを、参加者で共通認識として持つことができたのが、大きな収穫である。

(3)「きつねの窓」から何が見えて、何が見えなかったか —ファンタジーの非現実を通して現実を見る 斎藤鉄也 (全釧路教職員組合)

検定教科書の、文学を言葉遊びの題材に切り下げるようなファンタジーの解説と異なり、斎藤氏は丁寧な教材分析のもとに、まさに深い学びを実現していく。斎藤氏は全授業の板書を提示しているが、下の1時間だけでも、斎藤氏が子どもたちとともに、どれほど深い学びを実現できたかが明らかだろう。



理人は、卒業式の呼びかけでも、文芸の学びを通じて想像力が育ち、母との「けんか」という表層的な認識が改まったことを語っていました。

ファンタジーがファンタジーとして表現されていることの意味をふまえて深く読み、《認識の力》を育てる学びは、子どもたちの想像力を大きく育てることになります。 [レポートより]

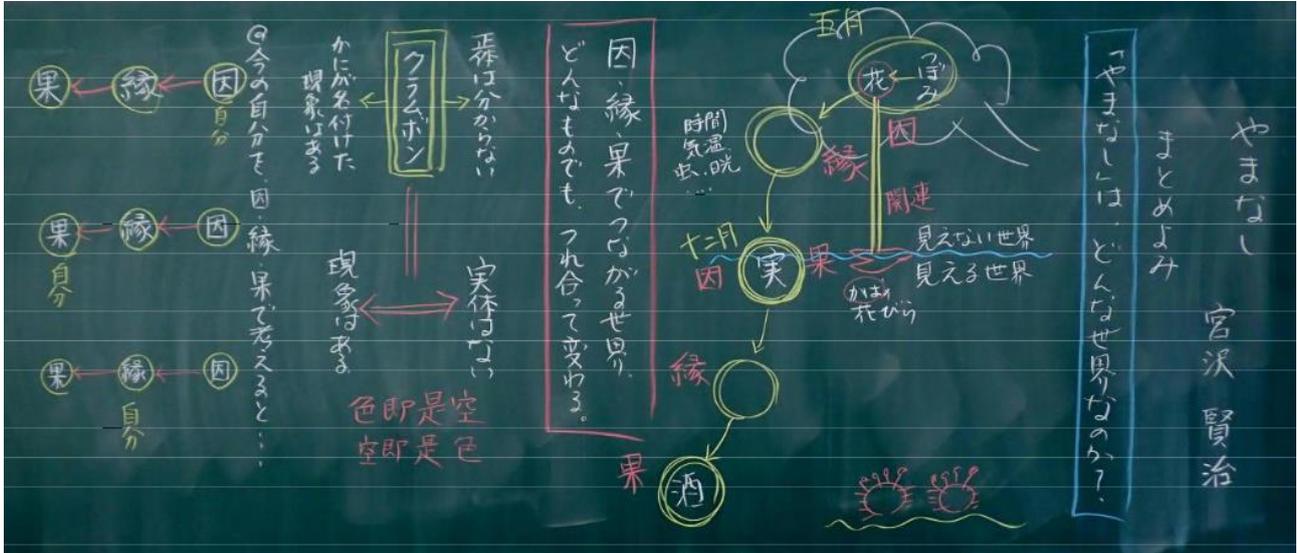
議論は、文学教材を単なる言語操作の道具としてしか扱わない改悪学習指導要領、ならびにそれを具現化した現行教科書への批判、そしてその方向に忠実に沿った指導書やワークシートに沿って授業をすることの危険性が中心になった。

◇何年か前までは、この作品もきちんとした「よみもの」であったはず。残念ながら現行教科書は、「文学作品を丁寧に読むことは無意味」という文科省の意向にそっており、多くの教員はそれにそった指導者やワークシートに沿って授業を進めている。
◇なぜ、この教材でこういう授業をするのか、という疑問に答えられることが必要になる。管理職からの圧力以前に、同僚間での合意形成に苦労することが多い。
◇文学を文学としてよむ場がほんとうに貴重になっている。 [参加者の意見より]

(4)卒業を前に「やまなし」を読む ～「因→縁→果」でつながり、つれあって変わる世界～

齋藤鉄也（全釧路教職員組合）

小学校最後の学習として、専門家の間でもきわめて難解とされる宮沢賢治の「やまなし」を生徒とともに深く掘り下げてよんだ実践。文芸研代表西郷竹彦氏の解釈を下敷きに、作品に登場するさまざまな動物や事象に「二重のイメージ」があることを、生徒ともに丁寧につきつめていく。そして、小学生でも宮沢賢治特有の仏教的な世界観を理解し、自分のものとしているのは驚きである。最後には「因→縁→果」というこの作品の基調を典型化し、今の自分の姿に重ね合わせさせているのが見事だ。ここでも齋藤氏は全授業の板書を提示されているので、そのうちの1時間を見てみよう。



●今の自分の姿を「果」として、小学校生活を振り返る

- ・1年生のときにはみんなと話したり遊んだりできなかった（因）けど、上級生が話しかけてくれたり遊びに誘ってくれた（縁）ので、みんなと楽しく過ごせる自分（果）がいる。
- ・5年生までは社会の様子や政治のニュースをちゃんと見ていなかった（因）けど、社会の勉強（縁）で、今の自分は世界のできごとや国の政治に目を向けて考える（果）ようになった。

●今の自分の姿を「因」として、中学校進学を見通す

- ・漢字を書くのが苦手（因）だけど、中学校では中間期末テストがあるので勉強する（縁）から、ちゃんと漢字を書けるようになる（果）。

●自分が「縁」になって、相手や状況を変えることができた

- ・今年、1年生が入学したころにはみんなとあまりなじめなかった（因）けど、私が中学年教室にさそっていっしょに遊んで（縁）、1年生がみんなと楽しく遊べる（果）ようになった。

〔レポートより〕

参加者の感想も、生徒の到達点の高さに驚嘆したものが多かった。

◇先行研究の知識を、ただ生徒が覚えることを目標にするというのではなく、それをもとに子どもたちがどのようなことを考えるのかを表現するまでの授業設計がすばらしい。

◇難しい作品だけに、ICTの時代にあえて逆行するような板書が、子どもたちの理解を助けていると思われる。

〔参加者の意見より〕

(5)新しい解釈による「こころ」の授業の試み

池田和彦（深川西高等学校）

従来の『道のためにすべてを犠牲にすべき』という信条を外れて『お嬢さん』に恋してしまった自分を許せず自殺した」という定説で描かれるKは、あまりにも禁欲的・超人的である。この解釈に疑問を持つことで、新たな解釈が浮かび上がる。教科書所収部分以外の本文も丁寧によみこみながら、新解釈により約30時間かけ、漱石の名作「こころ」をよみすすめた実践記録。新解釈の要点は以下の通り。

- ・Kの「進んでいいか退いていいか」は、「家の支えもなく無一文で経済的に自立できない者でも、お嬢さんに恋し結婚するような道に進んでいいか。それとも、自分の身のほどをわきまえて結婚

- などあきらめ(恋から退き)、一生孤独に生きるということではないか」というように解釈される。
- ・「精神的に向上心のないものはばかだ。」は、Kにとっては「お前は自分の身のほどをわきまえて結婚などあきらめ、一生孤独に生きるしかない」という、一種の「死刑宣告」に近いものだった。
 - ・Kの遺書の「薄志弱行でとうてい行く先の望みがない」は、「正真正銘の孤独となってしまった自分は、生涯の孤独に堪えて生き抜くことができるほど、強固な意志の持ち主ではない。『お嬢さん』への愛を完全に失い、この下宿の『ファミリー』からはき出されてしまった今、経済的に何の支えもない自分には、この先家族愛の中で生きる希望も、まったくない。」と解釈される。

生徒の感想も、当然ながらこの新解釈をふまえたものになっている。一方、参加者の感想は、共通進捗などに悩まされながらも、文学をよむ楽しみを大切にしたいという観点からのものが多かった。

- ◇作品をよみ込み、徹底した教材研究のもとに自分の解釈をぶつける。それは時に生徒から「違うではないか」と否定的に受け取られることもあるが、そのやりとりこそ、文学の授業の醍醐味ではないだろうか。私はこの新解釈を、それほど違和感なく受け入れることができた。
- ◇複数の担当者で同一科目を担当すると、共通進捗とかで自分の思うように授業が進められないことがある。そんな中でも、作品を丁寧によむという姿勢は大事にしたい。[参加者の意見より]

***教材研究のためのワークショップ 山川方夫「夏の葬列」より 池田和彦(深川西高等学校)**

中学校の文学教材、「夏の葬列」の冒頭部分をどうよむか、参加者が考えを出し合いながら、正しい日本語文法を活かしたよみ方を学ぶ。時間の関係上ごく短時間で終わりにしたので、詳細は省略する。

ICTの可能性——教えるためのツールではなく、生徒の主体的な学びのためのツールに

高校から2本のレポート。2本ともICTの活用の新たな可能性を示したレポートであるが、ICTを教えるためのツールではなく、本当の意味で生徒の主体的な学びのためのツールとしている点が、文科省や教委主導の活用法と似て異なる点である。

(6)学びを生徒に返す～学習者が主体的に学ぶICT・AIを活用した高等学校国語科の授業の可能性 戸川貴之(帯広柏葉高等学校)

毎年極めて刺激的なレポートを提出される戸川氏が、今年も「授業」はおろか、「教師」や「評価」、さらには「学校」そのもののあり方を根本から問い直す実践報告をされた。下は今回の報告のプレゼンテーションのうちの1枚であるが、皆さんはどのようにお感じになられたであろうか。

この先に起こること 「授業」の消滅



教室にいる必要が
少なくなる

逆説的に
人が集うことの意味の再確認
集まらなくていいなら
集まらないは短絡的
私たちは集まる良さを知っている



教室にいるからこそ
できることがある

集まることで起こる
「価値の移動」に
こそ意味がある
本物の評価につながる勇気を



教師は知識ではなく
学び方と外とつなぐ
役割を担う

教師の学びこそ、机から外に
オン、オフライン合わせて
人やこととつながる教師
知識とつなげる教師
おもしろーって思えることが
ある人が教師

当然ながら、戸川氏はいきなりこのような結論を述べているのではない。現任校で、戸川氏は生徒と「ともに」ICTやAIを活用しながら「学んでいる」。そこで「授業＝業を（教師が）授ける」というあり方への素朴な疑問、そして生徒の学びから気づいたことをきっかけに、自分の「学びを生徒に返す」ことの重要性を説く。戸川氏の主張は以下のような文言に端的に示されているだろう。

<ul style="list-style-type: none"> ・評価されなくても学びたければ学ぶ ・学びたくなければ、学ばなくていい ・学びたくなることが目的 ・学びに貴賤はない ・生きる＝学び 	<p>「一部の授業」の消滅・「登校」の必要性の消滅 ≠「学校」の消滅</p> <p>「学校」は永遠に不滅です 学びたい人が学びたいときにくる場へ [レポートより]</p>
--	---

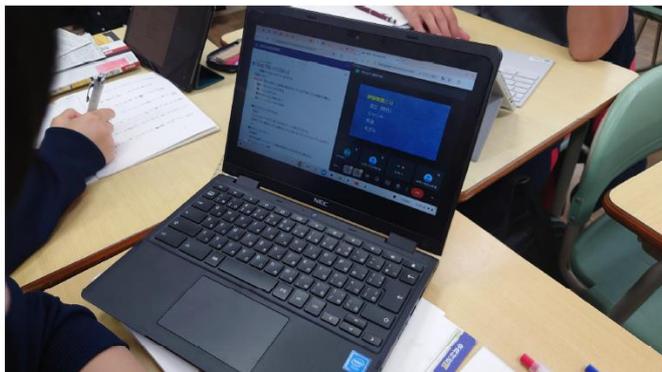
参加者からも、感嘆と驚嘆の声が多く聞かれた。

- ◇戸川氏の実践は、これまでのものを含め、ICTを「人と人をつなぐ」ツールとして活用している。だから、子どもたちの世界がICTを通じて広がっていくし、そこで学んで得たことを生徒が実感としてつかみとっている。
- ◇ICTを活用する一方で、そのような授業の中で、どのように生徒の人的成長を引き出すかが、今後の課題になってくるのではないかと。 [参加者の意見より]

(7)足を骨折したら、こんな授業になりました。～ ICTをフル活用した「伊勢物語」の授業の実際 鈴木圭子（苫小牧東高等学校）

不幸にして骨折してしまい、今まで通りの授業を行うことが困難になってしまった鈴木氏が、「なんとか動かなくていいように」ICTを活用したグループ学習で、「伊勢物語」第6段（芥川）を、生徒主体で学び取ろうとする。スライドづくり→発表→質疑応答→課題解決の流れで、生徒の自己評価や相互評価にもGoogle Formを活用する。その一方で紙ベースにこだわった教科通信を発刊しているのがきわめて興味深い。デジタル一辺倒でも、アナログ一辺倒でもない、その絶妙なバランスの中に、生徒の可能性が大きく引き出されているように思える。

国語を教えていて今一番心配なことは、「書くこと」です。大人でもパソコンを使っていると漢字を書けなくなってしまうように、全く弊害がないとは言えません。ただ、キーボードを使った方が、紙に書くよりも記述量が増えたり、書くことをいやがらなくなったという例もあります。簡単に文章を直すことができるので、文章を書くことに対する抵抗がなくなるようです。良い部分は認めつつ、学習の中で手書きの機会をしっかりと設けていくなど、バランスを保つことが重要になってきそうです。(中略)今のところ、タブレットを使って、人と人が疎遠になったという感じはまったくありません。むしろ、タブレットを挟んで、色々な話をするようになりました。 [レポートより]



参加者の感想も、ICT（デジタル）、教科通信（アナログ）の双方にわたって、その素晴らしさを称賛するものが多かった。

- ◇ICTは、生徒が活用できなければ意味がない。その点、この報告では生徒が主体的に活用しながら、鈴木先生の助言で自分たちの学びをさらに引き上げているのが素晴らしい。
- ◇「教科通信は趣味で作っている」というが、趣味の域を超えた重厚感があり、これによって生徒が得るものも大きいのではないかと。 [参加者の意見より]

まとめ——国語を学ぶことで、子どもたちと教師が、ともに人間として成長できる授業を！

今回参加して、授業にはいろいろな手法があるということが分かった。ICTを活用してもいいし、面白い板書をしてもいいし、生徒にこういう力を身につけさせたいという狙いさえ定まっていれば、もっと自由でいいんだ、ということがわかり、勇気づけられた。国語のよさは、よみの豊かなのだと改めて感じている。

最後に参加者から、今回参加しての感想などを述べてほしいと司会者が意見を求めた時に、初参加の方が真っ先に手を挙げて、上記の感想を述べてくれた。この感想の背後には、形式的に教科書を消化することを押し付けられ、ほんとうに子どもたちの成長を担うような授業をしたいと考えながら、それができないでいるという厳しい現実がある。授業をはじめとする学校の教育活動は、本来もっと創造的でなければならないはずである。文科省や教委が強要する、改悪学習指導要領べつりの、言語操作に終始する授業では、文科省が求めるような、表面的な言語操作ができる程度の、矮小化された「国語力」は身につくかもしれないが、子どもたちの「人格の完成」に資するような、ほんとうの意味での国語力は育たない。そのことが確認できたこと、そして子どもたちと教師の創造的な教育活動こそ、わたしたちの生きる希望につながるのだから、自信をもって実践していこうという希望が持てたことこそ、今年度の全道合研の最大の成果ではないだろうか。その他、次のような意見をいただいた。

- ◇言葉にこだわって授業をすること自体、昨今の厳しい状況の中で難しくなっているが、今回紹介されたような授業を実践し、来年のこの場に参加したい。
- ◇子どもたちにとって、何がほんとうに大事なのかということ、実践的に明らかにしていくのが、この教研の場ではあり、これからも大事にしていかなければならない。今年のレポートは、本当に大事にしなければならない教育観を、皆で確かめ合える場になり、明日からの教育活動の勇気をもたらえる場になった。
- ◇官製研でもこの教研でも、目の前の子どもたちに何ができるかを考えることは同じ。先日の官製研でも「ICTはあくまでひとつのツール」ということが確認された。
- ◇目の前の子どもたちに真剣に向き合い、一生懸命になっている先生方がこうして集まれるのが何より貴重な場であり、大事にしていきたい。

今回提出されたレポートは、いずれも単なる「授業報告」を超えて、「国語の授業を通じての子どもたちの人間的な成長」がみられるものであった。これだけのレポートがそろうのは、全国教研といえどもめったになく、その意味では全国教研と比べても遜色ないというところか、全国教研以上の質の高い議論ができたのではないだろうか。文科省や教委が言うような、形ばかりのICTの使用にこだわり、単純な言語操作の能力を身につけるような授業を、わたしたちは追求することはしない。わたしたちは、紙黒板のようなアナログであれ、ICTのようなデジタルであれ、それぞれの個性や創意工夫を生かし、子どもたちの人間的成長に資するような、「ほんものの国語力」をこそ、日々の実践を通して追求していきたい。

(文責：池田和彦)